〔文学篇〕

【論文】

マルローとモラン
―異文化表象をめぐる補遺―

畑　　亜弥子

Malraux et Morand : un complément autour des représentations des cultures étrangères

Ayako HATA

要旨（Abstract）

Deux écrivains du XXe siècle, André Malraux et Paul Morand, évoquent beaucoup les cultures étrangères, car le premier a été un homme actif et ministre de la culture, et le second, un écrivain diplomate. Nous abordons donc de la représentation des cultures étrangères chez ces deux écrivains. Nous essayons d'étaler des études précédentes concernant l'Orient et l'Espagne. Morand développe ses idées sur l'Orient et l'Occident en faisant la recension de la *Défense de l'Occident* et *La Tentation de l'Occident*. Pensant que l'art est individuel, Morand n'admet pas la position de Malraux qui prend le parti du grand nombre. À propos de la représentation de l'Espagne, nous constatons un exotisme de carte postale dans *La Flagellant de Séville* de Morand. En ce qui concerne la description de Goya, nous voyons l'exaltation du romantisme dans *Saturne, essai sur Goya* de Malraux. En revanche, nous constatons que pour Morand, une description de Goya du point de vue biographique suffit.

キーワード（Keywords）：アンドレ・マルロー、ポール・モラン、1920年代、東洋、スペイン

20世紀フランス文学において、行動する作家アンドレ・マルロー（1901–1976）と外交官作家のポール・モラン（1888–1976）は、作家自身が国境を越え移動しつつ、多くの異文化と向き合いながら創作活動を行った。マルローの小説には、中国、日本、東南アジア、スペイン、ドイツなどが登場し、そして芸術論や『反回想録』にまでコーパスを拡げると、マルローは無数の異文化について語る。一方モランも外交官作家として世界を飛び回りながら執筆を続けるなかで、アメリカ、東南アジア、日本、スペインを描く対象としている。

ところで異文化というと、文化的歴史的背景や価値観が全く異なる世界が思い浮かぶ。伝統的にはキリスト教徒が多いフランスにとっては、中東やアジア、日本である。モランはタイやカンボジアを思わせる王国の王子ジャリを主人公にした小説『生ける仏陀』（1925）を書き、東洋という異文化表象に取り組んだ。マルローがこの小説の書評を書いたことで、この二人の作家が1920年代のフランス知識人における西洋と東洋についての論争に参加したことをわれわれはすでに確認した[(1)]。しかしながら両者は、マルローの『西欧の誘惑』（1926）をめぐっても交錯しており、それがいかなるもの

受付日：2018年10月 9 日
受理日：2018年11月 6 日

かを本稿で取り上げたい。また両作家にスペイン趣味の系譜に少なからず属する作品があることも指摘できる。スペインはフランスの隣国でありヨーロッパ文化を共有しているため一見異文化とは捉えがたいが、フランス文学にはスペイン趣味の系譜があり、マルローの『ゴヤ論―サチュルヌ』もその系譜に連なる[(2)]。本稿では、20世紀フランス文学における隣国スペインの布置をめぐってこれまでの拙論を補足するかたちで、マルローとモランにおける「スペイン」とりわけ「ゴヤ」を考察したい。

1．二人の交流

マルローとモランの接点は1920年代に多く見られる。まず二人の邂逅について触れよう。プレイヤッド版のモラン『中編小説集』に付された年表には、マルローが『鎖につながれたインドシナ』の発行を開始したばかりの1925年11月初旬に、二人はサイゴンで会ったとある[(3)]。そのときポール・モランは、旅行中にかかった赤痢に苦しみ、バンコクを離れサイゴンのアンジェ病院に入院していた。マルローが病院にいるモランを訪ねたとのことである。このときモランは36歳、マルローは23歳。モランはこの年の９月に小説『生ける仏陀』の執筆を開始していた。すでに述べたようにマルローは東南アジアとおぼしい地を舞台にしたこの小説の書評を２年後にNRF誌上に書き、次節でとりあげるようにモランはマルローの『西欧の誘惑』を書評し、1920年代後半に東洋というテーマをめぐってお互いに作品を批評した。

ではその後この二人の作家はどのように交流したのだろうか。1930年代になるとプレイヤッド版の年表をみるかぎり両者の活動は交差することがなく、第二次世界大戦をむかえる。戦後マルローは文化大臣として政治の表舞台に立ち、一方ヴィシー政権下で外交官として働いたモランは戦後、本国フランスにいられないほどの苦境に陥った。マルローが1959年から1975年にかけて同時代の作家について語った対談集[(4)]では、モランと同じく戦後は微妙な立場となったモーリス・バレスの東洋については雄弁に語っているが、「東洋」というテーマを回想しているにも関わらずモランの名前は出てこない。戦後はお互いを取り巻く政治的状況の縛りゆえに、あるいはマルローが文学創作から離れたがゆえに、直接会う機会は少なくなったのではあるまいか。

2．ポール・モランによる『西欧の誘惑』批評

1925年雑誌『カイエ・デュ・モア』が発行した396ページという大部の特別号『東洋の呼び声』[(5)]は、東西文明をめぐるこの時代の思想的問題のメルクマールとなる存在である。その中で「東洋」と「西洋」が身体的なものか、「東洋」の影響、東洋脅威論などをめぐって同時代の知識人を対象に大規模なアンケートを実施した。ジッド、ブルトンやスーポーの名も見られるこの『東洋の呼び声』にはマルローとモランの名前はない。２人が「西洋」と「東洋」をめぐる論争に加わるのは、自らの著作や評論活動を通してである。マルローはモランの『生ける仏陀』評において、ジャリというアジアの王子は西欧人のように考えている、とモランの東洋表象に懐疑の念を表していた。ではモランによるマルロー評では何が問題になっているのだろうか。

ポール・モランは、1920年代にアメリカの雑誌『ダイアル』*The Dial*に「パリ便り」という文芸批評を連載していた。1926年12月付の「便り19」と1927年９月付の「便り22」で、マルローの『西欧の

誘惑』を批評している。まずは「便り19」を見てみよう。

アンドレ・マルロー氏の方は東洋の方を向いている。超現実主義の詩人としてデビューした後、この若い作家は中国へと発ち、広東や仏領インドシナの革命家たちの世界で2年間過ごした。帰国後彼は最初の散文の本、『西欧の誘惑』をわれわれに差し出す。一人のフランス人と一人の中国人との間に交わされたとする想像上の書簡という代弁者を通した（この中でマルローは、われわれの18世紀におけるヒューロン族やペルシア人の伝統を踏襲しつつ、中国人にあらゆる批判を執筆させフランス人にはさえないセリフしか許さない)、東洋－西洋問題を問うための抒情的な企てのことである。もっと正確さを求めることもできただろう。しかし、そうであっても彼の本は、我々を待ち構えている最も複雑で並外れた規模の問題の研究に寄与している。アジア全体がするように、マルローは個人に対抗して大多数に味方する。しかしすべての芸術は個人的なもので、マルロー氏は芸術家である。彼は自らの概念を、論理的な結論―それは自殺である―へと押し進めるのだろうか？その可能性を彼は全く嫌わないだろう[6]。

この作品はフランス人青年と中国人青年との間に交わされたとする想像上の書簡であるが、中国人リンからフランス人A.D.への手紙が圧倒的に多く、そのバランスの悪さを指摘している。しかしながら西洋文明と東洋文明それぞれの社会的文化的な問題や両者の関係性について、思想的検討を行おうとするこの内容についてある一定の評価は与えている。われわれの関心を引くのは後半の部分、マルローが個別的なものでしかない芸術作品の場で文化全体に関する思想を展開していることに対してモランが疑問を投げかけている点である。「個人に対抗して大多数に味方する」とは、モランとマルローの思想の違いを表している。マルローは西欧の大多数の人間にとっての問題をとりあげる。具体例をあげると、第二の手紙でリンが指摘するキリスト教批判[7]は、同時期の「ヨーロッパのある青年層について」の一節[8]に呼応するゆえマルローの意見とみなされる。これは長らくヨーロッパの人間の精神的な内面を支える役割を担ってきたキリスト教や教会という組織が、果たして今後豊かにその役割を担っていけるのかと疑問を投げかけていると解釈できる。このようにマルローは芸術家として芸術作品を用いて思想を表明している。この点が、「すべての芸術は個人的なもの」であるという意識を持つ作家モランにとって、納得がいかないところなのである。

一方「便り22」では、『西欧の誘惑』「東洋」と「西洋」との間の関係の問題が、アクチュアルなテーマの一つである[9]」とし以下のように述べている。

私は、マシス氏より15歳年下のアンドレ・マルロー氏の『西欧の誘惑』について話す機会がすでにあった。彼の本とマシス氏の本は2つ折の絵の2翼として補い合っている。彼は黄色人と白人という二つの文明を対決させるのだが、前者にいたく共感し、後者が崩壊するのをみたいという欲求がありありと見える。これは“インテリゲンチア”に共通の態度だ[10]。

モランはこのように東洋への共感を示すマルローに否定的態度をとり、共産主義者の考えだと批判している。この後では次のように述べている。

マルロー氏はあまりにもよくアジアの状況に通じているので、実際はただ一つの普遍的な色、ただ一つの世界的な雰囲気しかないことを無視できないだろう。共通する苦痛と絶望がある。彼は自身結論でこう言っている。「すでに破壊の低い声がアジアの最も遠いところでもこだましている。」それで？完全を目指すわれわれの探究において、東洋の方へ救いを求めることは本当に有益だろうか？東洋がわれわれよりすぐれているわけではないし、われわれと同等ではない。東洋は速度や機械の時代の長所は持たずに、あらゆる欠点を持っているからである[11]。

モランはマルローがとる立場には賛成しない。だからと言ってモランはもう一つの翼であるマシスの意見を支持するわけでもない。東洋に影響を受けているドイツ思想を危険視するマシスの態度については、ドイツはスラブ主義やアジア主義を食い止める城塞であったことを指摘し[12]、その中世回帰、カトリック回帰の思想については次のように反論している。

われわれには、ただ単に、新しい出発をするために宗教改革とフランス革命からの歴史全体を消すことを提案しているように思える。マシス氏は軽率ではないか？彼は宗教改革が、白色人種の唯一の砦になったアングロサクソン圏という、この道徳的で政治的な巨大な観念的存在を誕生させたことを忘れている。ロンドンやニューヨークなしのローマはどれほど重要だろうか？マシス氏は、この重要な事実は、簡単に例証を見つけられるのに長々と取り上げない。それは堂々たる方法による。彼がしきりに勧める解決法とは別のあるもの―第二の神聖ローマ帝国のようなもの―をあえて自分に許しているのだろうか。彼はあまりにも抽象概念に没頭しており、もっと一般的な性質のテーマに取り組む際、その均整の意味や世界についての実用的な知識が、非常に高い知性の持ち主であるにもかかわらず彼に欠けているのである[13]。

マシスの思想の歪みについては、NRF誌上でルネ・ジウアンも指摘していた[14]。「新中世主義者たち[15]」と呼ばれる急進的な一派の存在感が強かったので、マシスらの思想は論破する必要があったのである。モランは宗教改革の意義を論じマシスに反論する。したがってモランは「パリ便り」において、東洋をめぐってはマルローと違って東洋とは距離をとり、その文学作品では触れなかった思想的問題を考察している。『西欧の誘惑』については芸術への考察をからませ、『西欧の擁護』については中世回帰派の思想の性急さを指摘する。

3．終戦前のポール・モランの作品における「違和感」と「速度」

つぎに、フランス国外を舞台にした作品が多いポール・モランとエキゾチスムとの関係を問うことにしよう。ここではポール・モランの終戦前の作品のエキゾチスムを、「違和感」と「速度」というキーワードから読み解いてみたい。まずは登場人物が感じる「違和感」について、『夜ひらく』（1922）の冒頭をみてみよう。「序文」で語り手の私はピエールという人物から原稿を受け取ったことを示し、その時の私とピエールとの会話を叙述する。

「そういえばきみのフランス語（ta langue）も怪しくなってきたようだ」と私はさえぎった。

「僕もそれを残念に思う。僕はむしろ完璧に書きたいと思っているのだ。しかし何よりもまずは言うべきことを言わないといけないのだ。もし興味があるのなら、いつか僕がどのような学問をしてきたかを説明するよ。要するに僕は手当たり次第の書物と新聞とだけで仕上げてきた男なんだ。同じ年代のフランス人と付き合ったことは一度もない。僕は話す習慣（l'habitude de la parole）を失くしてしまった。それで僕はフランスにいても違和感を感じるのだ[16]。

ちなみにこの引用の最後の文章は堀口大學訳だと、「お陰で僕は、佛蘭西語を話す習慣を失ってしまった程だ。為に僕は、佛蘭西にゐる時でも、外国にゐるような気がするんだ[17]」。「話す習慣（l'habitude de la parole）」を「佛蘭西語を話す習慣」と補って訳し、「違和感」を「外国にいるような気」としている。ピエールは「話す習慣を失くした」と言っており、フランス語という母語を完全に喪失したというわけではない。堀口訳では強調されているが、この場面でピエールはフランス人のアイデンティティが薄くなってしまった、フランス人の戸惑いを吐露していると解釈できる[18]。

ピエールは世界各地に滞在し、カタロニア、トルコ、ローマなど各地での思い出を一つの短い物語で提示する。それは作中でピエールから原稿を受け取ったと設定されている作者のモランの人生と重なる。モランは職業柄複数言語を話し、頻繁に世界各地を旅している。したがってピエールが感じたような「故郷喪失感」はモラン自身も感じたことがあるということも想像に難くない。

つぎに「速度」について。モランには文字通り『急ぐ男』（1941）と題する小説がある[19]。これは何事につけ時間をかけないことをよしとする主人公ピエール・ニオクスの物語で、この青年がユーモラスにアイロニカルな筋書きを交えつつ描かれている。カフェで飲み物を注文し、すぐに出てこないと待ちきれなくて、カウンターへ行って自分で飲み物を作りがぶ飲みする。ニオクスは南仏のある不動産物件を買い取ることで頭がいっぱいで、カフェを出ると車を全速力で飛ばし家を見に行く。このようにニオクスはスピードを重視する男である。その様子は常軌を逸しており、シャツのボタンが多いと着るのに時間がかかるのでボタンをとってしまったり、レストランでは時間がかかるコース料理を避け一品料理にする。挙句の果てに、妊娠中の妻に七か月で出産するように懇願する始末である。このように『急ぐ男』は速度批判もこめた速度の物語である。

モランは他の作品では速度を美学として前面に出している。ここでは速度を文体に適用し、それがエキゾチスムに反映されていることを確認しよう。次にあげるのは『たったこの地球だけでは』（1928）と題されたアメリカから世界一周の旅をする物語である。各地の風景が足早に描写され、次の引用はシカゴの描写である。

シカゴ。暑さで震える空に、工場がその煙でゆっくりと署名している。町に注ぎ込むミシガン湖の岸辺に、水浴びをしている幸せな人々。彼らの美しい身体は、裸でも、億万長者であることを示す身体である。そして草原。黒と緑が入り混じった麦の大地。麦の穂が『サムソンとデリダ』のように波打っている。合計して二人のハンガリー人と四人のルーマニア人がいる[20]。

文が短く、動詞がない文も多いことが指摘できる。異国の土地の印象をメモ書きのように描写するこのモランの文体については、速度のあるエキゾチスムと表現されよう[21]。

モランの作品には故郷に「違和感」をもつ「故郷喪失」に近い状態のフランス人が登場し、「速度」

を神のように信仰する登場人物が存在し、「速度」を文体の特徴の一つとする。それは外交官であるがゆえ、母語を話す機会を奪われ移動に急かされ続けた作家ポール・モランの姿と重なる部分があるだろう。しかし『夜ひらく』のピエール、『急ぐ男』のニオクスらが、作者モランとどの点が似ているのかという問題はここでは問わない。ただ『夜ひらく』のピエールが提示する登場人物の文化的アイデンティティや速度は、モランの作品の異文化表象の特質と結び付けて考えられるかもしれない。そうすると終戦前のモランの作品の異文化表象は、「違和感を内包するエキゾチスム」「速度のあるエキゾチスム」と表現できると思える。

4．スペイン表象の比較

次にマルローとモラン、両者の作品におけるスペイン表象を比較する。まずモランとスペインとの関係をたどろう[22]。モランは外交官試験を受ける前に、スペイン語を習得すべく1911年夏（23歳）バルセロナに滞在する。そして1918年にはマドリードのフランス大使館に勤務する。代表作となる短篇集『夜ひらく』には、「カタローニャの夜」が収められており、ナポレオン侵攻時のスペインの啓蒙主義者を主人公にした長編小説『セビリヤの鞭打ち苦行僧』[23]を1951年に書いている。この小説の第３章にはゴヤが登場する。

そこでマルロー、モラン、スペインをつなぐものとして“ゴヤ”を考えたい。なぜならマルローはゴヤ論を執筆しており、またモランの小説『セビリアの鞭打ち苦行僧』（以下『セビリヤ』と略する）はゴヤが登場するだけではなく、各章にゴヤの版画の語句が掲げられており、ゴヤにささげられた書物だともいえるからである。さらにプレイヤッド版『セビリヤの鞭打ち苦行僧』解説者のミシェル・コロンブによると、モランはこの小説を書く際マルローの『プラド美術館のデッサン』を参照したとのことである[24]。マルローとスペインをつなぐものは、「スペイン内戦」や「エル・グレコ」や「ピカソ」もあげられるが、そこにモランを入れると共通項として「ゴヤ」というキーワードが浮かび上がってくる。

4.1. 政治的なものの取り扱い方

19世紀初頭、1807年にナポレオンはフランス軍のスペイン進駐を命ずる[25]。翌年６月、ナポレオン１世の兄であるジョゼフ・ボナパルトがホセ１世としてスペイン国王の座に即位する。このような経緯がナポレオンの「スペイン侵略」と呼ばれる史実である。ゴヤはホセ１世のもとでも宮廷画家として活動するが、愛国心も持ち続ける。そしてこの時期のマドリード民衆の蜂起を題材にしている。それが有名な『1808年５月２日．エジプト人親衛隊との戦闘』と『1808年５月３日．プリンシペ・ピオの丘での銃殺』である。ここではモランの『セビリヤの鞭打ち苦行僧』とマルローのゴヤ論におけるこの史実の扱い方を比較してみたい。

『セビリヤの鞭打ち苦行僧』は、ナポレオンのスペイン侵攻下のスペインを舞台にしたドン・ホセと妻マリア・ソルダードを中心にした物語である。第一部はドン・ホセの鞭打ちのシーンに始まり、その後フランス啓蒙思想家の書物を読むドン・ホセ、政治に無関心な妻マリア・ソルダード、フランス人を激しく憎悪する従兄弟のブラスが登場する。史実をもう一度振り返ろう。1795年から平和大公

として権力を握っていたゴドイの圧政に苦しんでいた民衆には、ナポレオンが解放者と見えていた側面もある。しかし反乱を起こしフェルナンド7世として即位した新王が、ナポレオンに呼び出されバイヨンヌに幽閉されると、民衆は侵略者としてのナポレオンの顔に気づく。民衆が各地で反乱を展開する中、ナポレオンの兄ホセ1世が即位するが反乱は続く。『セビリヤの鞭打ち苦行僧』では、民衆の反乱のシーンが幾度も現れ、この史実の中で展開する。

これに対しマルローのゴヤ論では、芸術論であるため当然かもしれないがこの史実の取り上げ方が小さい。それは『5月3日の銃殺』を批評するなかで登場している。ナポレオン軍の侵略を告発したこの絵画によりゴヤは「スペインの友愛を肉化しはじめる」が、しかしゴヤは「五月三日」の悲劇に至る前スペインの圧制からの解放者としてナポレオンを歓迎した「対仏協力者」であったことも指摘される[26]。しかしその扱いは小さい。なぜならマルローの『サチュルヌ』の目的は、『サチュルヌ』の1951年の序文が示すように人間の暗部を見つめそれを芸術作品において昇華させた天才ゴヤを論じることだったからであろう[27]。

4.2. スペイン表象のエキゾチスム

ポール・モランの『セビリヤの鞭打ち苦行僧』には、いわゆるスペインの「絵葉書的風景描写」が見られる。例えば冒頭の通りの描写を見ていただきたい。

> 満月に照らされて、ロス・クルサドス通りという名の細い坑道と、こぶのような通りのくぼみとカットの鋭い石が敷き詰められた舗道が一つづきになった。月明りの下の寝巻きの少女たちのように、白い家のファサードがあらわれる。スペインの白[28]。

これは足早にその土地を通過する旅行者的な視点である。『たったこの地球だけでは』の風景描写ほど速度はないが、絵葉書的なエキゾチスムは見られる。しかしそれほど多く登場するわけではない。

また「スペイン」という言葉は、ナポレオンに対抗する「スペイン」として頻繁に登場する。例えばゴドイが逃亡しフェルディナンド7世が即位となった際、ドン・ホセは以下のセリフを口にする。「スペインが満足しているから私もうれしいよ。おまえはどう思うかい？[29]」このようにホセはスペインへの愛国心を表すが、フランスの啓蒙思想に心酔している彼の愛国心はどこかおぼつかない。しかしこの「スペイン」は政治をめぐる会話に登場するのでエキゾチスムとは無関係である。したがって、終戦前のポール・モランの作品に見られた「違和感を抱えたエキゾチスム」「速度のあるエキゾチスム」は『セビリヤの鞭打ち苦行僧』には見られない。

一方すでに拙論で論じたように『サチュルヌ』において、マルローはフランス人作家としてというより、普遍的立場からゴヤの功績を描こうとする態度を示しているゆえ、フランス人のエキゾチスムの対象としてスペインが登場する場が少ない[30]。例えばスペインの文化的クリシェである「残酷さ」について、マルローがゴヤから引き出すのは「サチュナリア」という豊穣な世界であった。このように『サチュルヌ』では「残酷」というスペイン表象の負のイメージのクリシェに正のイメージの普遍的価値が与えられ、エキゾチシムの度合いは少ない。

4.3. ロマン主義的なもの―高揚をめぐって

フランス文学には『ロランの歌』以降スペイン趣味があり、隣国でありながら異質性をもつこの国の文化はフランス文学的イマジネーションのもとになってきた。スペイン趣味の系譜とロマン主義の歴史は、とりわけ19世紀以降のスペインを舞台にした文学作品で交錯する。ロマン主義の主な特徴をブリュノ・ヴィアール『フランス・ロマン主義作家を読む』に求めると、「時間における別の場所（中世）あるいは空間における別の場所（オリエンタリスム）の探究[31]」とある。スペイン表象は「空間における別の場所の探究」という意味でロマン主義的である。例えばテオフィル・ゴーチエ『スペイン紀行』（18）には、スペインにおいて「現代文明に対する嫌悪と異国に美を発見しようとする態度は、結局のところ、異国逃避 dépaysement と呼称されるロマン主義の特徴的な一つの傾向[32]」がみられるという。ではゴーチエにスペインの書から107年後に出版されたマルローの『サチュルヌ』はロマン主義とどのような関係をむすんでいるのだろうか。

ここで問題にしたいロマン主義は、ロマン主義研究の大家ポール・ベニシューが『作家の聖別―フランス・ロマン主義―１』[33]で論じている、19世紀の社会において宗教的なものの影響力が低下する中で、政治運動の盛り上がりやそれへの幻滅とともに展開した「ロマン主義」ではなく、その「性質」である。つまり宗教的次元と政治的次元と文学の次元が一体となって展開した「ロマン主義運動」のことではなく、ブリュノ・ヴィアールがロマン主義の特徴としてあげている「高揚」である。『100語でわかるロマン主義』のなかの一節を見ていただきたい。

> 高揚とは、倫理的性質を持つ心的な過熱状態であり、価値判断の過剰を意味する。その対極には、冷笑（シニズム）、倫理的放棄がある。ディエルの概念において、倫理と心理は不可分のものである。主体の内面生活は、たえまなく他者や自己について価値判断を下すことに追われている。その判断は明晰な場合も盲目な場合もある[34]。

マルローのゴヤ論の文章には、「倫理的性質を持つ心的な過熱状態」で、「価値判断の過剰」である高揚が見られる。それは次に示すように、疑問・反語、強調、最上級、そして「天才」という表現が多く見られるゆえではないかと思われる。まず、反語というレトリックと天才という表現が出てくる引用から。

> 外見と肉感の芸術を破壊すること―しかしゴヤがもし35歳で夭折していたら、彼がここまで行きつくよう運命づけられていたと言いうるだろうか？あまたのバロックの装飾家たちの一人となっていたかもしれないし、非凡の才能無きにしもあらずといった肖像画家になっていたかもしれないのだ。後年、ゆるぎないものとなる言語の口ごもりを見ないのであれば、フランシスコ・バイユーほどはインパクトがない、典雅なタピスリーの下絵画家になっていたかもしれないのだ。若気のいたりを取り繕わぬ天才がいるだろうか？今日マンテラのデッサンを見るとゴヤを思わずにいられないのだが…（下線部は執筆者による）[35]

次は強調が見られる引用である。

通りを過ぎる女性を描く真理はあるだろう。ゴヤのレアリスムと呼ばれているものは、誰もが—そしてゴヤ自身も！—主張しているように、観察によって与えられたと言うより、幻想によってもたらされたと言えよう（下線部は執筆者による）[36]。

そして次の引用には最上級の表現がみられる。「私にとって重要だったのは、一連の作品を通して西欧の精神的冒険のうち最も絶望的なものの一つを把握することだったのである。[37]」

一方、モランの小説『セビリヤの鞭打ち苦行僧』におけるゴヤの描写は、伝記に近い。ゴヤは第三章に登場するが、そこではスペインを追われボルドーへ亡命せざるをえなかったゴヤの伝記的事実そのものが見える。第三章でゴヤが登場した部分の一節を見てみよう。

マドリードでゴヤはついには息苦しくなってしまっていた。サン・イシドロの家で、彼はノスタルジックにモンペリエやパリの友人たち、とりわけボルドーの友人たちを思っていた。マドリードは愚かにもこのエリートを追い出してしまった。いまやゴヤにとって、マドリードが流刑地であった。彼はとうとうフランスへ養生しに行く許可をとって、ボルドーに居を移してしまった[38]。

淡々とゴヤの状況を説明する語り手にロマン主義的な高揚は見られない。

まとめ

このように「東洋」と「スペイン」をめぐって、マルローとモランという二人の作家の異文化表象を考察してみると、20世紀文学における文化的他者をめぐる言説がどのような思想を展開するのかが見られ大変興味深い。フランスでは、マルローのように東洋の表象に疑問を抱きつつも東洋を語っていた作家もいた。またモランはマルローが東洋に肩入れしすぎだと考えていたし、芸術作品が個別的なものであるという考えから、作品で思想を語ることに疑問を抱いていた。二人は「東洋」をめぐって異なる見解をもち、雑誌という場でお互いに批評しあっていたのである。

二人のスペイン表象については、ナポレオンのスペイン侵攻の扱われ方や、エキゾチスムやゴヤをめぐる言説を比較した。モランは、『セビリヤの鞭打ち苦行僧』で真っ向からこの政治事件をとりあげ、終戦前の小説群と違いエキゾチスムの度合いは少なかった。マルローの方は『サチュルヌ』で、地球文明を考察する俯瞰的な立場からゴヤを論じていたため、エキゾチスムの度合いが少なかった。ゴヤの描かれ方には、マルローにはロマン主義的な高揚がみられたが、モランには伝記に近いものがみられた。

このようにマルローとモランの異文化表象を、「東洋」と「スペイン」とを合わせて改めて考察すると、思想史の縦の問題と横の問題が浮かび上がって来た。「東洋」をめぐっては思想史の共時的横の問題で、1920年代の「西洋」と「東洋」をめぐる論争の立ち位置が問題になった。「スペイン」をめぐっては、エキゾチスムやロマン主義など思想史の通時的な縦の問題が浮かび上がった。

注

1）この論争については以下の拙論を参照。HATA Ayako, « Quelques remarques sur l'arrière-plan du compte rendu de Malraux : "*Défense de l'Occident*, par Henri Massis" », 『フランス文学論集』，九州フランス文学会，第41号，2006年，pp.39-52. 畑亜弥子「文化を翻訳する―1920年代のフランスにおける東洋」，熊本大学第11回21世紀文学部フォーラム「越境する世界文学」報告書（井上暁子編），2015年９月30日，pp.1-12.さらに東洋表象のアポリアという観点からこの論争を論じた次の研究がある。鈴木啓二「触媒としての外部―ヨーロッパ的「精髄」の回帰をめぐって」，『フランスとその＜外部＞』，石井洋二郎、工藤庸子編，東京大学出版会，2004年，pp.3-25.

2）次の拙論を参照。畑亜弥子「マルロー『ゴヤ論―サチュルヌ』について―スペイン趣味における位置づけの試み―」，『文学部論叢』，107号，熊本大学文学部，2016年，pp.61-71.

3）COLLOMB Michel, « Chronologie », in *Nouvelles complètes I* de Paul MORAND, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 1992, p.XLVII.

4）GROVER Frédéric J, *Six entretiens avec André Malraux sur des écrivains de son temps* (1959-1975), coll. « idées », Paris, Gallimard, 1978.

5）*Les Cahiers du mois*, « Les Appels de l'Orient », Paris, Emile-Paul, septembre-octobre, 1925.

6）MORAND Paul, *Lettres de Paris*, Paris, Salvy, 1996, p.171.

7）「かつてあなたがたの信仰は巧みに世界を整えてきました。それは私に敵意を呼び起すほどです。調和した偉大なる苦悩が、その信仰のおかげで石化した、野蛮と言っていいほどの姿を尊敬の念なしに見ることはできません。しかしながら愛の強度全体が磔にされた身体に集中するような瞑想を、動揺することなしに想像することはできません。キリスト教というのは、私にはあらゆる感覚が由来する学校のようなもので、その感覚のおかげで個人が自分自身について持つような意識が形成されたのです。(MALRAUX André, *La Tentation de l'Occident,* in *Œuvres complètes I*, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 1989, p.65.)

8）「教会は人間を自分自身から引き離すことに専心してきたように思える。教会は人間を無視することはできないし、あまりに低く見ることもできなかった。神に結び付いていたからである。しかし教会は、苦しみと同時に自ら判断する権利を人間から遠ざけた。教会は意識の方向性を樹立した。そして何世紀もの間、あらゆる意思、あらゆる特異性、あらゆるキリスト教徒の心の恐れを従属させながら、大聖堂のように、われわれをいまだに支配する世界のイメージがそこからキリスト教の姿をつくりあげた。その姿により世界が人間に不可欠となり得るような。」(MALRAUX André, « D'une jeunesse eur opéenne », in *Ecrits*, « Les Cahiers Verts 70 », Paris, Grasset, 1927, p.136.)

9）MORAND Paul, *Lettres de Paris, op.cit*., p.197.

10）*Ibid*., p.199.

11）*Ibid*., p.200.

12）*Ibid*., p.198.「ドイツはヨーロッパにおける東洋の前哨なのか？マシス氏はときにわれわれを納得させる。しかしながら反対に彼は、昔も今もスラブ主義やアジア主義に対抗する最前列の城塞であるドイツ、という別のドイツをわれわれに提示できないのだろうか？彼は、この点について沈黙を守るという過ちを犯している。」

13）*Ibid*., p.198-199.

14）拙論 « Quelques remarques sur l'arrière-plan du compte rendu de Malraux : "*Défense de l'Occident*, par Henri Massis" » を参照いただきたい。

15）GILLOUIN René, « Le Problème de l'Occident (I) », *La Nouvelle Revue Française*, n°186, mars 1929, p.309.

16）MORAND Paul, *Ouvert la nuit,* in *Nouvelles complètes I, op.cit*., p.72. 訳は次の訳書を参照した拙訳である。ポール・モオラン『夜ひらく・夜とざす』，堀口大學訳，新潮文庫第 7 編，1928年.

17）*Ibid*., p.5.

18）この引用部分の解釈は以下の研究が参考になった。大村梓「翻訳家堀口大学を巡る一考察―ポール・モーランという言説」，『山梨国際研究』，11号，山梨県立大学，2016年，pp.1-11.

19）ポール・モラン『急ぐ男』の「速度」をめぐる解釈については以下の論考を参照した。吉田城「プルーストからポール・モランへ―新しい文学形式を求めて」，『アヴァンギャルドの世紀』（宇佐美斉編），京都大学学術出版会，2001年，pp.285-319.

20）MORAND Paul, *Rien que la terre*, « Les Cahiers Rouges », Grasset, 2000, p.20.

21）エキゾチスムの分類に関しては、それが表現する他者に対する態度という観点からみると、ピエール・ロチの侮蔑的な態度のエキゾチスムと、他性に対するあらゆる感覚を表現するセガレン的なエキゾチスムとがある。本稿では、他者に対する態度というより描かれ方を問題にした。

22）次の論文を参照した。ZUMBIEHL François, « Paul Morand et la guerre d'indépendance », in *L'Histoire de l'Espagne dans la littérature française*, dirigé par Mercè Boixareu et Robin Lefere, Paris, Honoré Champion, 2003, pp.669-682.

23）MORAND Paul, *La Flagellant de Séville,* in *Romans*, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2005, pp.879-1173.

24）DAMBRE Marc, « Notice du *Flagellant de Séville* », in *Romans, ibid*., p.1521.

25）スペイン史に関しては以下の文献を参照した。立石博高編『新版 世界各国史16 スペイン・ポルトガル史』，山川出版社，2000年.

26）MALRAUX André, *Saturne, essai sur Goya*, coll. « la Galerie de la Pléiade », Paris, Gallimard, 1950, p.110.『サチュルヌ』からの引用は基本的に1950年版のものである。

27）*Ibid*., p.9.「『カプリチョス』の発売は禁止された。『戦禍』も『不協和』もゴヤの生前に頒布されることはなかった。「聾者の家」の絵画はひとにぎりの人たちにしか知られていなかった。[…] そして偉大なる宗教的様式に匹敵する様式を見出したことにもある。私がここで分析しようと試みるのはこのような天才である。」拙論「マルロー『ゴヤ論―サチュルヌ』について―スペイン趣味における位置づけの試み―」を参照のこと。

28）MORAND Paul, *La Flagellant de Séville, op.cit*., p.881.

29）*Ibid*., p.904.

30）拙論「マルロー『ゴヤ論―サチュルヌ』について―スペイン趣味における位置づけの試み―」を参照のこと。

31）VIARD Bruno, *Lire les romantiques français*, « Licence Lettres », Presses Universitaires de France, 2009, p.10.

32）桑原隆行「夢の旅――ゴーチエの『スペイン紀行』について」，テオフィル・ゴーチエ『スペイン紀行』

（桑原隆行訳）所収,《叢書・ウニベルシタス885》, 法政大学出版局，2008年，p.422.

33）ポール・ベニシュー『作家の聖別―フランス・ロマン主義〈１〉1750-1830年―近代フランスにおける世俗の精神的権力到来をめぐる試論』，片岡大右・原大地・辻川慶子・古城毅訳，水声社，2015年．BÉNICHOU *Paul, Le sacre de l'écrivain 1750-1830. Essai sur l'avènement d'un pouvoir spirituel laïque dans la France moderne*, « Bibliothèque des idées », Paris, Gallimard, 1996.

34）VIARD Bruno, *Les 100 mots du romantisme*, coll. « Que sais-je? », Presses Universitaires de France, 2010, p.49. 翻訳は以下を参照した。ブリュノ・ヴィヤール『100語でわかるロマン主義』，小倉孝誠・辻川慶子訳，« 文庫クセジュ »，白水社，2012年．

35）MALRAUX André, *Saturne, essai sur Goya, op. cit*., p.18.

36）*Ibid*., p.32.

37）MALRAUX André, *Saturne, le destin, l'art et Goya,* in *Écrits sur l'art I, Œuvres complètes, IV*, volume publié sous la direction de Jean-yves TADIÉ, avec la collaboration d'Adrien Goetz, Christiane Moatti et François de Saint-Cheron, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2004, p.19.

38）MORAND Paul, *La Flagellant de Séville, op.cit*., p.1145.